

マルクス貨幣理論の研究

飯 田 繁

新 評 論

著者紹介

飯田 繁
いいだ しげる

1906年鹿児島に生まれる。1930年東京大学経済学部経済学科卒。大阪商科大学教授、大阪市立大学経済学部教授（経済学博士）、同経済学部長を経て、1970年大阪市立大学名誉教授・岐阜経済大学教授となる。この間、日本学術会議会員（第8、9期）を務める。岐阜経済大学学長（1972～81）を経て、現在、岐阜経済大学教授。専攻は金融論・物価論。

著 書 『最近の物価政策と景気』（1936年、大阪商科大学経済研究所）。『物価の理論的研究』（1949年、伊藤書店）。『利子つき資本の理論』（1954年、日本評論新社、新訂、1958年）。『利子つき資本』（1959年、有斐閣）。『現代銀行券の基礎理論』（1962年、千倉書房）。『兌換銀行券と不換銀行券』（1963年、千倉書房）。『インフレーションの理論』（1968年、日本評論社）。『マルクス紙幣理論の体系』（1970年、日本評論社）。『商品と貨幣と資本』（1981年、ミネルヴァ書房）。

編 著 『インフレと金融の経済学』（1979年、ミネルヴァ書房）

現住所 芦屋市平田町 2—8—306 （〒659）

マルクス貨幣理論の研究

（検印廃止）

1982年4月15日 初版第1刷発行

定価 4800円

著 者 飯 田 繁

発行者 二 瓶 一 郎

発行所 株式 新 評 論
会 社

〒160 東京都新宿区西早稲田 3—16—28

電話東京（202）7391番

振替 東京 6—113487番

落丁・乱丁本はお取替えます

印 刷 第 一 印 刷

製 本 黒 田 製 本

© 1982 飯田 繁

3033—330176—3177

Printed in Japan

資本主義発展の理論	P・スウィーजी	都留重人訳	上A 製5	三〇五 〇〇〇 円頁
貨幣と信用	下平尾勲		上A 製5	二〇三 〇〇〇 円頁
為替と信用	徳永正二郎	国際決済制度 の史的展開	上A 製5	三〇三 〇〇〇 円頁
国債管理の経済学	井田啓二		上A 製5	二五二 〇〇〇 円頁
国債管理とスタグフレーション	一ノ瀬篤		上A 製5	三〇三 〇〇〇 円頁
国際短期資本移動論	A・ブルームフィールド	中西市郎・岩野茂道訳	上A 製5	四〇三 〇〇〇 円頁

序 文

経済学体系のなかで、貨幣の理論がどう位置づけられているか、貨幣の本質・発生・諸機能の論理・現実がどのようにとらえられているかによって、それぞれの経済学体系の特質・色調がおおよそきまる、ともいえるのではなからうか。

マルクスは、まず貨幣理論を商品理論から資本理論への中間項として位置づけた。そしてそのうえに立って、かれは、商品価値を一般的・社会的に表現する等価形態（一般的等価形態）として貨幣の本質を規定し、その本質にもとづいて貨幣の発生・諸機能を説明した。そのように位置づけられ、このような本質・発生・諸機能をもつものとして規定された貨幣の理論がマルクス経済学体系の客観的科学性を導入・展開したのである以上、マルクス経済学体系を正しく学びとるためには、われわれは、まず、難解とされるマルクス貨幣理論の究明にどうしても取りくまなければならぬ。だから、難解を理由にマルクス貨幣理論の理解をタナ上げしたままでは、われわれはマルクス資本理論の研究や現代資本主義経済の分析に挑むことはできないし、またたとえそれらに挑む蛮勇をふるっても、しよせん無意味におわろう。

マルクス貨幣理論の研究がマルクス経済学体系を学ぶうえで不可欠の一条件であるのは、さらにまた、貨幣機能・運動の理論が資本総過程理論のなかの一環をなすからでもある。

貨幣の資本への転化とともに、マルクス経済学体系は貨幣理論から資本理論へ上向・進展する。しかし、貨幣が資本に転化しても、貨幣は消えない。したがって、貨幣理論は資本理論のなかでも生きている。資本総過程のなかの流

通過程、いわゆる“げんじつの流通過程”のなかでは、資本としての貨幣（貨幣資本）は“たんなる貨幣”として、また資本としての商品（商品資本）は“たんなる商品”として、たがいに対立しあうのだから。“価値の増殖”をめざす資本主義経済でありながらも、“げんじつの流通過程”のなかでは、“単純な商品流通経済”となにも変わらない“価値の転形”だけがおこなわれる。資本運動 $(G-W \xrightarrow{A} P_{\text{m}} \cdots P \cdots W'-G')$ の始点・終点に立つ $G \cdot G'$ は、総過程的には資本であるが、“げんじつの流通過程” $(G-W, W'-G')$ では、増殖・還流しない“たんなる貨幣”として機能するということが、したがってそこでは資本理論ではなく、貨幣理論がそのまま適用するということは、マルクスによってくりかえし強調されているのに、マルクス経済学者のなかでさえとかく見落とされがちだ。そして貨幣問題は、資本問題からばつかりと切り落とされ、さも古典社会（単純な商品流通方式）に固有なものとされているようだ。

貨幣理論は、しかし、たんに資本理論に先行するだけではなく、資本理論のなかにも過程的に実在する。だから、マルクスは、『資本論』第一巻のはじめの諸章では十分に処理できなかったいくつかの貨幣問題、たとえば、蓄蔵貨幣、商業信用、信用貨幣・兌換銀行券、世界貨幣・金などにかんする諸問題を、『資本論』第二・三巻のいちだんとすすんだ叙述段階で精密に解説している、というより、そうするほかはなかったわけだ。ことに、これらの諸貨幣問題のなかには、資本理論の最終段階にあらわれる利子つき資本・銀行信用問題などと緊密にからみあい・まざり合っており、単純な貨幣問題としてだけでは処理できない二面性的な諸要因さえもがふくまれているからだろう。

資本主義社会の貨幣問題は、こうして資本のベールでおおわれることによって、問題の核心が貨幣にあるのか、それとも資本にあるのかの、在りかをめぐって見そこなわれることにもなる。現代インフレーション問題がその一例である。

古典インフレであろうと、現代インフレであろうと、インフレーションの本質・核心が貨幣理論段階にあるという点では、なんのちがひもない。貨幣・金量の表章（価値表章）としての不換紙幣（古典的価値表章）・不換銀行券（現代的価値表章）の発行・流通総量がほんらい代表すべき流通必要金量を額面でこえることによっておこる“価格標準

の事実上の切り下げ”・独特な物価騰貴のなかにインフレーションの本質がひそむのだから。そこで、インフレの本質を説くさいには、古典・現代にかかわらず、インフレーションの“貨幣性”(“資本性”ではなく)が強調されなければならない。インフレーションは、資本総過程のなかの“げんじつの流通過程”でおこる貨幣事態である。価値増殖しない・価値転形だけがおこなわれるその過程のなかでなければ、インフレーションはおこりえないのだから。そうしたインフレの“貨幣性”を本質的基盤としてこそ、具体的現象としてのインフレの“資本性”も正しく展開されうることになる。

インフレーションの“貨幣性”をわたくしがこのように強調するわけは、それだけの理由があるからだ。ところが、これにたいして、さもわたくしが貨幣数量説をぶちまくってでもいるかのように錯覚される向きがあるかもしれない。だが、インフレーションの“貨幣性”強調論は、諸商品価格(物価)によって決定される流通必要金量(“貨幣流通の諸法則”の支配)を背景・基礎とするのであって、これを逆転させる貨幣数量説的構想とは完全に対立する別天地のものである。

わたくしは、マルクス貨幣理論の研究を、みぎのような視角から資本主義経済の段階にまでおしすすめた。ところが、“貨幣の資本への転化”については、なにも説かないで、ただそれを前提とするのにとどめた。本書では、資本理論は研究対象とされていないので、やむなく。なお、その点では、まことに粗雑ながら、拙著『新訂利子つき資本の理論』、『商品と貨幣と資本』を参照していただけたら幸いである。

本書の出版については、下平尾勲教授のお世話で新評論の二瓶一郎社長、藤原良雄編集長から格別のご芳情をいただいた。いろいろとご配慮くださった編集関係者各位、その他の方々にも深謝したい。

一九八二・一・一

飯 田 繁

目次

序文

第一部 本論

第一章 貨幣の本質・発生・物神性

I 貨幣の本質（一般的等価形態）

——貨幣と金との関係——

二六

II 貨幣の必然性

——貨幣発生の論理と現実——

三三

III 貨幣の物神性

——“商品→貨幣→資本”の物神性——

三四

第二章 貨幣の諸機能

I 価値尺度の機能（↓価格標準の機能）

——価値から価格へ——

三六

II 流通手段の機能

1 铸貨の“等価性”

① W-G-Gの困難性 ② 恐慌の抽象的可能性 ③ 流通必要量の被規定性

四一

2 铸貨の“象徴性”——価値表章・不換紙幣（国家紙幣）の本質と発生——

五一

III 蓄藏貨幣の機能

六〇

はじめに——“貨幣としての貨幣”…………… 六

A “貨幣”——“貨幣としての貨幣”の登場

B “貨幣としての貨幣”の内容と序列

C “貨幣としての貨幣”機能を果たす代用物

1 蓄蔵貨幣の形成論理…………… 七

A 流通手段の内在的否定

B 流通手段の超越的否定

2 貴金屬…………… 七

3 蓄蔵貨幣プールの役割…………… 七

IV 支払手段の機能…………… 七

アプローチ——流通手段機能の否定と総合…………… 七

1 商業信用…………… 二六

A 単純な商品流通方式のもとでの商業信用と、資本主義的な商品流通方式のもとでの商業信用

B 商業信用の貸借関係

C 商業信用と銀行信用とのまざり合い

2 信用貨幣…………… 二九

A 本質と運動

B 兌換銀行券の二重性（利子つき資本性と信用貨幣性）——不換銀行券の二重性（利子つき資本性と価値表章性）——

性（価値表章性）——

V 世界貨幣の機能…………… 二九

——世界貨幣と金——

はじめに——“貨幣としての貨幣”の総合…………… 二九

A 世界貨幣としての金（金銀複本位制度から金本位制度へ）

B 世界貨幣の総合機能

第三章 貨幣の価値・流通量、貨幣・代用貨幣の運動

——貨幣数量説批判——

- 1 古典的視点——金本位制度と金準備……………一〇六
- 2 現代的視点——金のゆくえ（『金貨論』は正しいか）……………一〇七

はじめに——インフレーションの貨幣性……………一〇五

A マルクスの『貨幣数量説批判』

B 『インフレーションの貨幣性』への批判論

I 貨幣の価値と貨幣の流通量……………一〇二

——流通必要量の決定——

- 1 流通必要量が意味するもの……………一〇二
 - ① 受動性 ② 迂回性 ③ 現実性、そこから生じる合理化、量的制限化 ④ 不可測・無用論は不適正
- 2 流通必要量を決定する諸要因……………一〇七

A 流通手段のケース

(a) 商品価値と貨幣価値 (b) 市場価格、諸商品の取引量と貨幣の平均的流通速度 (c) 算式の左辺と右辺、総括

B 流通手段・支払手段の総合ケース

- 3 流通必要量の伸縮性とそれへの対応性……………一〇七

A 伸縮性

(a) 商品と貨幣 (b) 伸縮のタイム・ラグ

B 対応性

(a) 蓄蔵貨幣・準備金の役割 (b) 準備金節減の合理化 (c) 貨幣から代用貨幣へ

II 貨幣・代用貨幣の運動……………一〇六

- 1 『貨幣流通の諸法則』の支配と反映……………一〇六

A 支配

B 反映

2 紙幣流通の独自の「法則」——インフレーションの論理（本質と現象）—— 三三四

A 古典（紙幣）インフレ

(a) 紙幣インフレの本質 (b) 紙幣インフレの発生

B 現代（不換銀行券）インフレ

(a) 不換銀行券インフレの本質 (b) 不換銀行券インフレの発生

むすび——「マルクス貨幣理論」研究の小さなまとめ—— 三三七

① 序列 ② 範域 ③ インフレ本質の貨幣性

第二部 補論

第一章 貨幣の必然性 三六九

——貨幣発生論の理論——

I 貨幣発生論の方法 三六九

II 流通主義的「貨幣必然論」 三七三

III 商品社会での「交換」の役割 三六四

IV 直接的交換の矛盾と困難 三六九

V 矛盾の解決 三七一

第二章 貨幣理論の地位と課題 三七一

——商品理論から資本理論への中問項——

I 貨幣の理論的段階 三七一

II 資本主義的社会関係のもとでの貨幣流通 三三九

III 貨幣理論の研究課題	三七
1 商品理論との関連	三七
2 資本理論との関連	三四
IV 貨幣理論と貨幣政策	三〇
第三章 貨幣流通の諸法則が支配するもの・ところ	三一
I 貨幣流通の諸法則の支配とはなにか	三一
II 貨幣流通の諸法則の支配領域	三六
III 貨幣流通の諸法則の非支配領域	三七
第四章 貨幣流通の諸法則と貨幣政策	三〇
I 貨幣政策論の位置づけ	三〇
II 貨幣流通の諸法則と貨幣政策目的の設定	三六
III 貨幣政策の作用と限界	三六
——法則性と政策性との関係——	
あとがき	四七

マルクス貨幣理論の研究

第一
部
本
論